

獣医解剖・組織・発生学用語

— 和英・英和索引 —

日本獣医解剖学会編

まえがき

私たち日本獣医解剖学会は、これまで解剖学用語集、組織学用語集、発生学用語集、家禽解剖学用語集と、つぎつぎに用語集を刊行してきた。そのいずれの用語集も原語であるラテン語に適切な日本語を対照させたものである。この作業は、世界獣医解剖学会に多くの会員を送っている日本獣医解剖学会に課せられた当然の作業といえるだろう。

しかしこの厳しい作業は、少なからぬ労苦をとまなう。用語集は一種の教典であるので、ささいなミスといえども許されないし、そもそも用語の数が尋常ではないため、一つ一つのチェックに膨大な時間を要する。さらに獣医解剖学者にとって気を使うことは、医学および動物学の両方で用いられている用語との整合性をいかに図るかである。

用語の大切さを理解できない人にとって、このように神経を使う作業は気が遠くなるような別世界の出来事に思えるであろう。こんな作業をこなす人々の集まりである日本獣医解剖学会は、他分野からみると偏執狂的な人々の集まりにみえるのかもしれないと私は危惧することすらある。

しかし事実は全く異なる。用語集の刊行は私たちの学会が永年にわたって細々と携わってきた作業ではあるが、私の前任の学会長である牧田登之先生(前山口大学農学部長)が学会長になられて加速度的に進められた作業である。

私の知るかぎり、牧田先生は偏執狂ではない。用語集の社会的存在意義を十分に理解された解剖学者である。ご本人は、用語集の刊行そのものは自分の性に合わないと思っておられた節がある。その牧田先生の遺言とでもいえる作業が、単に日本語とラテン語が対照された用語集の刊行ではなく、多くの獣医学、医学、生物学者

IV

が欲している日本語、ラテン語、英語が対照された用語集の刊行であった。

この牧田先生の想いに対して日本獣医解剖学会は、極めて慎重であった。私たち日本人が英語を母国語とする人々を差し置いて、英語の用語を用語集に挿入しても良いものであろうかという危惧である。しかし私たちは、日本語を英訳して世界に発信している。日本語と英語の対照は私たち日本人が日常的に行っている作業である。ラテン語を英訳する作業ではなく、日本語を英訳する作業の結果として、ラテン語、日本語、英語が対照された獣医解剖学の用語集を刊行するのであれば、それは獣医解剖学者の責務の一つであろうという結論に、私たちはたどり着いた。

とはいえ、このような作業は多大の労苦をとまなう。牧田先生の情熱に加え、その情熱に応えられた渡辺徹教授(前名古屋大学)、谷口和之教授(岩手大学)および木曾康郎教授(山口大学)の能力、実行力がなかったら本用語集は刊行されることはなかった。日本獣医解剖学会の会長として私は4先生のご尽力に心からの敬意を表したい。またこれまでも多くの用語集を刊行してくださり、今回も快く応じて下さった(株)学窓社に深謝する。

2000年12月

日本獣医解剖学会 会長
林 良博

「獣医解剖・組織・発生学用語」の発刊によせて

日本獣医解剖学会は、その前身の日本獣医学会家畜解剖分科会と称した時から連続して家畜解剖学に関連した用語集を発行してきた。1966年にすでに「家畜解剖学用語」が家畜家禽解剖学懇談会用語委員会によって発刊されていたが、1978年に家畜解剖学分科会が同名の用語集の初版を、更に1981年にその改訂・再版、1987年に改訂・3版を刊行した。次いで本学会としては獣医組織学用語(1993)、獣医発生学用語(1993)を相次いで刊行し、1996年にはこれらを合冊にして「獣医解剖・組織・発生学用語」とした。またこれとは別に家禽解剖学用語(1998)を発行した。これらはいずれも *Nomina Anatomica Veterinaria* 第3版(1983)、*Nomina Histologica Veterinaria* 第2版(1983)、*Nomina Embryologica Veterinaria* 初版(1993) また *Nomina Anatomica Avium* (1993) をそのまま和訳したものである。

これらの発刊の時点ですでに学名(ラテン語)だけではなく英訳もつけるべきではないかという要望が強かったのであるが、これを壊踏させる要因も多かった。そのうちの3点を挙げてみれば、まず第一に、*native* な英米の研究者に対して、日本の学会が英語の用語を発表することの気恥ずかしさである。国際用語委員会による発表を待つべきであるとするのが正論であろう。高知医大の瀬口教授から委員会案を拝見させていただき、いまこうして我々の内部資料のような形で発表することになった。獣医学の国際用語委員の方々に責任を負わせることをさける為に当学会の責任で行うことにした。第二に、しからは己の英米の研究者に依頼することを考えないではなかったが、手許にある医学英和辞典を数点比較してみても、英文の解剖学教科書、最近の学術報告をみても英語の用語はかなり自由に使われていて、これが正当な用語ということが言い難いことがわかった。学名を英語靴りにしたようなものがかなりの数にのぼって

いる。これは我々にとって古文のようなものが彼の人々にとってはラテン語なのであれば当然のことかもしれない。第三に、これまでの獣医解剖学用語が医学界の「解剖学用語」にひたすら準拠してきたが、新しい「解剖学用語」が発表されるのではないかということもあった。

にもかかわらず、若い学会員の方からパソコンに入力して英和の用語集を出したいという提案があった為に、学会理事会ではとりあえず学会が英語の用語集を発表し、しかる後にしていただきたいという対応をすることになった。老害のそしりをまぬがれないところである。この対応を取り急いで行うために原案の作製を、解剖・組織学を岩手大学谷口和之教授に、発生学を山口大学木曾康郎教授に、家禽学を前名古屋大学渡辺徹教授にお願いして、その原案を学会を構成する16大学の家畜(獣医)解剖学の全講座に回覧して意見を出していただく方式をとった。本書の書名に家禽学を含めなかったのは、あくまで家畜解剖の範囲に限定した家禽学という意味であって他意はない。国際用語委員会の我国の委員にも回覧はしたが前記の理由で直接の責任分担はお願いしなかった。また国内・国外の学会外の方々に御意見を伺った箇所もあるが、原則として内部資料ということで御芳名はここで明らかにしない。

急いだとはいえ、さすがに原案作製各位の仕事量は過酷であって、また出版社の作業日程のこともあって、予定より約2カ年遅れてここによく完成した。また個々の英訳では、暫定的とはいえ学会として発表する用語であれば、一つの学名に一つの英名で対応したのであるが、学名自体に[]付で併記しているものがあり、和名も、一例をあげれば糸粒体とミトコンドリアがあって、ミトコンドリアのほうが広く使われていても糸粒体のほうが先に記載してあるという事情があって、一筋縄ではいかなかった。また解剖、組織、発生、家禽の各用語に初版からの独自のシステムが残っているのなるべく統一を試みたけれども密度の差、重複、など合冊であることを払拭しきれていない。

ただ実用上の便宜性を最優先して、索引を全四部を通しの頁にした上で、和英・英和ともに二カ国語を併記し、また前記の糸粒体と

ミトコンドリアなどを別々の単語として収録してあるし、医学解剖で遊げられている人名を付した用語もあえて採録してある。

このような形での紙に印刷した用語集はこれが最後になるかもしれないという想いもする一方で、ペーパーレス時代といいつつもやはり印刷したものを手にしないと安心しきれないという現況や、新作の小説をコンピューターで流す作家が出はじめたとはいえ、大型書店にはミリオンセラーの本が山積していることをみると、本書もあるいは再版・改訂の幸運に恵まれるかもしれない。その日のために利用される諸賢の御意見をぜひお伺いしておきたい。完成した時点ですでに、本書が医学界にしてきた目くばりに比較して、動物学、植物学、水産学の他生物教育の用語や、身近な畜産学の用語とのすりあわせが不十分であることが明らかである。これは言うは易いが今後の大課題である。

最後に、前記の原案作製の三先生と数々の建設的な意見を寄せられた会員諸兄、出版社(株式会社学窓社、田中敏昌社長、山口啓子専務)の献身的な御協力に再度お礼を申し上げますと共に、従前同様に日本中央競馬会の御援助をいただいたことを特に記して感謝の意を表する次第である。また身内のことではあるが、学会長の東京大学林良博教授と九郎丸正道助教授の御配慮にあずかることが大であったことを付記させていただきたい。

新しい世紀を目前に控えて、「前世紀の遺物」であるやもしれない「本」の形の用語集を感慨をもって世に送る世話人をさせていただいたことを学会員全員に謝してこの小文を閉じる。

2000年12月

前日本獣医解剖学会 会長
牧田登之